鈍感王子とその従者

黒猫ふろー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
鈍感王子とその従者

【Ｎコード】
Ｎ５１６０ＢＡ

【作者名】
黒猫ふろー

【あらすじ】
成績優秀、眉目秀麗、なんでも卒なくこなす我が主君は、ひとつ大きな問題を抱えていた。鈍感な王子とその従者によるコメディ風味なストーリー？

第一話

「きゃあ、見て！アールグレイ様よ」
「本当！今日も麗しいわね～」
「あのさらさらの髪に優しげな目元。あぁ、いつ拝見しても素敵だわぁ」

きゃあきゃあ騒ぐ貴族の子女殿たちの脇を通り抜けて先を急ぐ。

なるほど、私の主人殿はこの近くにいるらしい。
あのやたらと目立つきらびやかな容貌は、こういうときには役にたつ、と心の中で思いながら足を動かすと、彼女たちの言葉の通りに噂の主人はそこにいた。

採光用の窓から光を受けてキラキラと輝くハニーブロンド。同じく光を通して透き通ったように見える瞳は、新緑の緑と湖の深味の双方を宿しており、優しげで整った顔立ちとの印象を一層強いものにしている。
加えて一見スラリとして見える長身は、護身の一環として武術を足しなんでいるため、よく見れば引き締まっているのがわかる。オートクチュールの制服に身を包んだ姿も、他の生徒と変わらないはずなのになぜか気品に満ち溢れ、ただの制服をより一層格の高い優美な衣装か何かのように見せさせている。
それは生まれ持った血ゆえか、それともカリスマか。
まぁとにかく、今日も王立総合学園特別待遇生徒でありキーマン王国の王位継承権第1位である私の主君、アールグレイ＝キーマン＝ベルガモット様は、やたらめったらキラキラしい背景を背負って立っていた。

「で、殿下とお話出来て光栄です。あの、わ、私、私…」

どうやら主人は、下級生と思われる令嬢と話をされていたようだ。

「そんなに緊張しなくてもいいよ。堅苦しいのは好きじゃないんだ。みんなにはグレイかベルガモットと呼ばれてるから、君にもそう呼んで欲しい」

「え、あ。それでは・・・グ、グレイ様・・・」

優しくにっこりと微笑めば、真っ赤な顔をした令嬢が下を向く。うつむいた少女はきっと雲の上且つ憧れの人の顔を直視できなくなったのだろうと誰でも想像できるのに、当の本人はそんなことカケラも思いもしないのだ。「あぁ、だから緊張しないで。こちらを向いて」と見当違いのことを言っている。

（・・・まったく、これだからコイツは・・・・・・）

声をかければかけるほど顔を赤くし身体を硬くする令嬢と、それに慌てて見当違いのことを口にする王子といういつもの光景に内心ため息をつきながら、私は憐れな恋の被害者を助けるべく足早に2人の下へと歩いていった。

「グレイ様、こちらにいらしたのですね」

会話する姿を見ていたのだから、もちろんいることは知っていたのだがそこは社交辞令というものだ。

「あぁ、アイリか。どうした？」

「次の講義の予定が変更になりましたので、それを伝えに」

そう告げてから、さも今気づいたかの様に隣の少女に目を向ける。

「あぁ。お取り込み中とは知らずにすみませんでした。失礼ですが、そちらは？」

小柄な身体がかわいらしい少女は、王子の視線が外れたことにほっとしたあと、それでもすぐに話題の先が自分に戻ったためにびくっと身体を揺らしていた。（“お取り込み中”という言葉に反応しただけかも知れないが。）

「彼女はリゼ。チャイダンルックの男爵令嬢だ。
今度の誕生際で社交界デビューするそうで、わざわざ俺のところまで挨拶に来てくれたみたいなんだ。」

顔を真っ赤にしながらモジモジしているチャイダンルック令嬢を見て、その初心（うぶ）な反応に好感を持つが、よくよく考えれば彼女は王子のもとに単身乗り込んできたのだ。だだ初々しいだけでなく勇気と度胸も持ち合わせているのだろうと印象を修正しておく。

お言葉ですが王子、その様子ではただ挨拶に来ただけだと本気で思っているでしょう？
私たちから見れば、彼女が貴方に好意を持っているのは一目瞭然なんですよ。いい加減気づいてくださいませんかね？

本当ならば全力で突っ込みたいところなのだが、彼がそういう性質だというのは十分すぎるほどに理解してしまっているため、叫ぶのは胸のうちだけに留めておく。

「そうですか。それはご丁寧にどうも。
今度の国王の誕生際は、来賓も多いですが少しは自由な時間も取れましょう。・・・もし時間があれば、お二人でお話しするお手伝いでもいたしましょうか」

最後の言葉は彼女にしか聞こえないよう小声になった。
当たり前だ。他の令嬢の方々に聞こえでもしたらそれこそパーティーどころではなくなってしまう。
こういった調整も従者である私の仕事だったりするわけだが、彼女は何を勘違いしたのか、「えええ2人で！2人ですか！？どうしよう、アールグレイ様と2人きりなんて・・・」と、見ているこちらが心配になるほど動揺して、その後何度も何度も小刻みに頷くことで必死に返答を返していた。

「なかなか面白い方でしたね」

チャイダンルック令嬢が頭を下げて退出した後、私はグレン様にそう申し上げた。

「そうかな。もう少しリラックスして話ができたら彼女の人となりがわかるかも知れないけど」

あれだけ緊張してたら、わかるものもわからないよ。
そういって彼女が去っていった方向を眺めるグレン様。
ああいう状態で、パーティーなんてうまく出来るのかちょっと心配だよ、なんてどこまでもずれた感想をお持ちのグレン様に、やっぱりこの人はわかってなかったのか、と今度は隠さずに盛大にため息をつく。

「な、なんだよ・・・」
「まさかとは思いますが、彼女が緊張してた理由を『自分が王族だから』なんてそれだけの理由しかお考えになっていないのですか？」
「・・・・・違うっていうのか？」
「違うも違う、大ハズレですよ。もちろんそういった理由もあるにはあると思いますが、彼女が頬を赤らめていた一番の理由は貴方です。貴方に憧れや好意といった感情をもっていたからに決まっています！」
「そんな！今日初めて話したんだぞ！？」

そんなんで俺のことが好きだとか、ありえない！！
あせったように叫ぶ主君を見て、あれほどまでにわかりやすい反応を残してくれたチャイダンルック令嬢に申し訳ない気持ちになってくる。

「貴方は初めてあったかもしれないですが、彼女にとっては前々から憧れを感じていた可能性もあるかもしれないじゃないですか。そういう場合を想定してくださいと、何度も言っているでしょう？」
「それはそうだけど・・・」

わからないものはわからないんだ、と仏頂面でこちらを見てくる我

が主君。

「わかってください」
「わからない」
「それでもわかってください」
「わからないよ」
「理解しようとしてください」
「そんなのしてるさ。だけど、わかりたいんだけど、最初のきっかけすら気づくことができないっていうのにどうしろっていうんだよ」

2人してにらみ合う私とグレイ様。

「・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・ふぅ」

やがて、どちらとも無くため息をついたかと思うと脱力し、その場にへたり込みそうになる衝動を抑えながら顔を覆った。

「はぁぁぁあ。こんなんで、王位継いだ後外交やっていけるかまた心配になってきた・・・」
「私も、殿下の呪いの強さを改めて再認識しましたよ・・・」

2人して窓や壁によりかかるが、気疲れという名の脱力感が抜けるわけもない。

わかっているのだ、この王子は別にわざと気づかないフリをしているわけではないのだということを。

本人も、出来るだけ恋愛感情の機微を察知しようと努力をしているということを。

【呪い】。

眉目秀麗で、学業も武術も政務だって卒なくこなすこの王子様は、自身にひとつ、大きな問題を抱えていた。
王子の問題というより王家の問題とも言うべきそれは、数代前の王から代々伝わるある呪いのせい。

『直系の王族は、恋愛感情を理解できない』

極秘というわけでもないため高位の臣官なら誰でも知っているこの事実は、一見かわいらしいような呪いに見せかけてそのくせ実は、王家の存続に関わる大問題でもあったのだ。
この、眉目秀麗高スペック天然たらしな我が主君は、どんなに好意を寄せられたとしてもそれに気づくことは出来ないし、それゆえハーレムを作っても理解ができない。
向けられる好意に疎いだけでなく、恋愛感情自体を理解することが出来ないため、自身も異性に恋愛としての感情を抱くことがない。
つまり、恋愛ができない。

そう、我が主人は恋愛が出来ないのだ。

第一話（後書き）

他作品が連載停止中のため、リハビリの一環として始めてみました。
良ければお付き合いくださいませ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5160ba/

鈍感王子とその従者

2012年1月14日11時49分発行